

日本福祉文化学会 事務局長
前嶋 元

2016年度日本福祉文化学会会員総会報告

10月23日(日)午前、東京大会会場である東京立正短期大学において標記総会が開催された。協議事項として「2015年度事業報告」「2015年度収支決算書及び監査報告」「2017年度事業方針(案)」「2017年度予算書(案)」を審議し、原案で可決された。報告事項として「2016年度第12回福祉文化実践学会賞の選考結果について」「2016年度前期事業報告と後期事業予定」「2016年度 予算執行見込み」「会員状況に関する報告」「2016年度第28回大会について」が行われた。多くの会員の方々にご出席いただき、ありがとうございました。



特別講演前の演奏プログラム「ヴィヴァルディと福祉・文化」の一コマ

文化の交差点②

仏教国タイから学ぶ心豊かな「死」の文化 —Peaceful Death—

日本福祉文化学会副会長
岡村 ヒロ子

BUNKA NO KOUSATEN Hiroko OKAMURA 2

先日、タイ国王の訃報に国民が号泣している様子が報道されていた。国王がどれほど慕われていたかがはかりしれる。日本とタイの「死生観」「死の医療化」を通じて心豊かな「死」とは何かを考えるというテーマでタイ郡部の病院・寺・高齢者宅・ガン末期の患者宅を訪ねる機会を得た。タイもかつて経済ブームに沸いたが、通貨危機に見舞われた時、国王は「足るを知る」経済が重要と国民に説いた。その精神が国民の健康観・生活観・死生観にしっかりと根づいている。タイの僧侶は国民にとって身近な存在であり影響力もつ。僧ウイサロ師が唱える「Peaceful Death」という教えに心が動いた。「Peaceful Death」とは「静かな死」を意味し、死への不安がなく、死を受け入れ、心の支えだったことを思い出し、悔いなく死ぬことだという。不安とは、タイの僧侶は国民にとつて身近な存在であり影響力もつ。僧ウイサロ師が唱える「Peaceful Death」という教えに心が動いた。「Peaceful Death」とは「静かな死」を意味し、死への不安がなく、死を受け入れ、心の支えだったことを思い出し、悔いなく死ぬことだという。不安とは、

と、治療が望めない患者には家族に囲まれて最期を迎える幸福感を伝える在宅医療を勧める。家族には傷の処置の仕方や死に逝く人への関わり方等々を指導し、地域の保健チームが家族・本人の不安に24時間体制で対応する。医療スタッフ、家族、本人からは「気負いが感じられず、自然体だった。これが「足るを知る」ことだと教えられた。」(今回は2017年3月発行の予定です)

会員情報

- 2016年10月31日までに、ご入会された方のお名前と所属ブロックをお知らせ致します。(敬称略)
木下一雄(北海道ブロック)、佐藤義尚(北陸ブロック)、韓仁愛(関東ブロック)、義基祐正(関東ブロック)、小津順子(関西ブロック)、鄭茂晟(関西ブロック)、林祐慎(関西ブロック)
- 2016年10月31日現在(会員数)
個人会員 305名 団体会員 7団体

第27回日本福祉文化学会全国大会 東京大会報告

特集
東京大会を終えて
大会実行員長 月田みづえ

第27回日本福祉文化学会全国大会を『多様化する(家族)がひろく未来—ふくし・文化・地域の視点から—』をテーマに平成28年10月22日(土)と23日(日)、東京立正短期大学で開催した。天候に恵まれ、老いも若きも大勢が集う、学びの秋にふさわしい、2日



オープニングセレモニー

福祉文化実践学会賞
「加藤美枝氏」が受賞
選考委員会委員長 永山 誠
加藤氏は40歳代の民生児童委員活動に始まり、介護保険制度発足前後に世田谷区保健福祉審議会区民委員等を歴任、98年の第2回日本福祉文化国際会議の世田谷区老人実行委員長を務めた。その間世田谷区老人大学(現生涯大学)の講師を20年間務め、

退任後は修了生と共に「高齢者の力を子育てに、子どもの力を高齢者の生きがいに」をモットーに「こぼえ広場」や老ケアと異世代交流を目指す住民主体型地域デイ「たまご」他孫の家」を組織、先駆的にコミュニティ活動を展開している。



描いたという。大会開始、会長、大会実行委員長あいさつに続き、飯田俊明氏のピアノソロ演奏で開幕。参加者が選んだ音で、即興の曲を奏でるエキサイティングな内容であった。午後の5つの交流分科会では、子どもの居場所や育つ地域文化の創造、異世代交流、造形遊びワークショップ、戦中・戦後の家族と福祉文化など熱い議論が時を忘れて続いた。懇親会は、近くのピザレストランで、区内の障害者施設職員のバンド演奏で盛り上がるなか、全国からの会員や翌日報告する韓国の招聘者などが交流のひと時を過ごした。2日目は、会員総会の後、3つの部会(子どもの福祉と文化、地域における福祉と文化、障がい者・患者を取り巻く文化)で、学会ならではの研究課題が提起され、学びを深めた。一方、研究委員会企画「福祉文化研究への招待(ワークショップ)」では、学会の研究実践を発展・リードする議論が展開された。午後の演奏プログラムでは、あまり知られていないヴィヴァルディの孤児院における福祉・教育・文化実践を学び、古楽器による演奏で心があらわれた。大森美香氏による特別講演「家族にとつての幸せ—NHK朝の連続テレビ小説「あさが来た」脚本執筆を通して見えてきたこと—」では、作品を作るなかで家族のあり方を問い、ひとり一人が特性を生かしていくいきいきと生きていくために大事なことが語られ、聴衆の感動をさそった。シンポジウム「多様化する(家族)がひろく未来—ふつう—つてなに?は、弁護士・母子生活支援施設長・行政書士のパネリストが性的マイノリティなど多様な家族も増え、誰もが生きやすい社会への提案をした。心身ともに刺激的な2日間であった。



懇親会のスペシャルライブ

東京大会の概要を ダイジェストでお届けします！

I 第1交流分科会

報告：川北典子

子どもをとりまく諸問題と居場所づくり



話題提供者から、商店会による地域の活性化、子ども食堂を始めとする地域での子ども・子育て支援活動、東京および気仙沼での冒険遊び場を核とした子どもの居場所づくりについて、実践的な報告を伺いました。その後、参加者を変えての質疑応答・意見交換等を行いました。参加者の活動分野もさまざま、話題は現代の子どもをめぐる社会環境・地域環境、親子関係、福祉的ニーズなど多岐にわたりました。現代の子どもをとりまく状況は深刻ですが、一人ひとりの住

民が少しの気づきを得ることで、支援の輪を広げていけるのではないかと確認し、有意義な情報交換の場となりました。

II 第2交流分科会

報告：前嶋元

子どもが育つ地域環境



の深いつながり、実践を整理していく意義について「お話しただいた。その後すべての参加者から意見をいただき、多様な視点と共通基盤の確認ができたように感じる。

杉並区立こども発達センター所長村一浩氏からは、「センターにおける子育て支援の一環としての発達支援、公・民・学が協力した地域発達支援体制について」、杉並区立西荻南児童館館長戸澤正行氏からは、「20年前より区内のすべての児童館で実施してきた『地域子育てネットワーク事業』という地域ぐるみの子育て環境づくりについて」、荒川区スクールソーシャルワーカー山田恵子氏からは、「ワーカーとしての活動を通して見えてきたスクールソーシャルワークと子育て環境づくりとの深いつながり、実践を整理していく意義について」お話しただいた。その後すべての参加者から意見をいただき、多様な視点と共通基盤の確認ができたように感じる。

III 第3交流分科会

報告：加藤美枝

異世代交流とこれからのコミュニティづくり



住民主体型デイサービス「たまごの家」の1場面

はじめに絵本『ピースブック』（トッド・パール作／童心社）を映し、「へいわってなあに」のリズムと色彩をめぐる、初代会長の「平和なくして福祉なし」に熱い思いを馳せた。
世田谷区は本年度から介護予防・日常生活支援総合事業の1つとして住民主体型のデイサービスを始めた。その1つ「たまご（他孫の家）」の実践報告があり、休憩の後、参加の方々と意見交換を行った。参加者は大学関係者、県社協の方、施設勤務の方、高齢者総合相談の方、地域交流サロンを始めた理学療法士、病院勤務から福祉機関の仕事に転じた理学療法士、事業準備中の鍼灸師でカウンセラーの7名。たまごの家からは事例報告者の応援にデイ利用者の91歳になる男性ほか6名が参加した。

IV 第4交流分科会

報告：蘭田碩哉

造形遊びワークショップ「親子でともに遊べる場づくり」



一人一人の作品を大きなパネルにまとめて記念撮影。右後ろで帽子と眼鏡でVサインをしているのが指導者の矢生氏。

このワークショップは造形遊びの指導者・矢生秀仁氏（子ども環境デザイン研究所）が、地域の親子を集めた造形遊びの場を楽しく展開する場面に、学会参加者が参加してその様子を観察シートに記入し、それを踏まえて意見交換をするという組み立てだった。子どもたちはどの子も画用紙や段ボールの小片や紙コップなどの素材にあつという間に飛びつき、思い思いのモノづくりを始めた。他方親たちはさまざま、黙って見守る親、子どものやりたいことを援助する親、親子で一緒に作る親もいた。意見交換では、造形遊びが持っている「自分を見つめる」力を改めて認識し、親や指導者は子どもに教えるというスタンスではなく、形づくりを通して子どもとコミュニケーションを図ること、それも言葉を通じてではなく、モノや動作を通じて伝えることの重要性を確認した。

V 第5交流分科会

報告：結城俊哉

戦争をとらして戦中・戦後の家族と福祉文化を考える



本分科会では、立教大学の浅井春夫先生を話題提供者としてお招きし、「沖縄戦」と呼ばれる人災であり反（非）福祉的行為である「戦争」が家族にもたらした悲劇として、戦争孤児たちの戦後の社会的処遇の問題点をはじめ、戦時中、国家の為の兵士養成の「男らしさ」をめぐるジェンダー論、さらに、近年、日本の社会状況における子ども・若者の貧困と経済的徴兵制への危惧について貴重なお話を伺うことができました。
戦後71年目の今年、日本が抱える象徴的な社会問題として戦争と福祉文化を考える契機となる警鐘を鳴らして頂くことができたのも有意義な交流分科会でした。

VI 研究委員会企画

報告：蘭田碩哉

研究委員会ワークショップ「文化の眼鏡で作るフレームワーク」



「研究ストーリー」を考えて発表し合った。希望者は研究委員会が今後アドバイスを続けることが伝えられた。

福祉文化研究とは、福祉現場を文化の眼鏡で見直し、課題を発見して、その解決を目指すこと、という考え方を土台に、研究プラン作りに挑戦した。
はじめに蘭田碩哉（学会顧問）が、福祉文化研究は「福祉文化の研究」ではなく、「福祉の文化研究」という総論を述べ、ついで「対象」「活動の場」「文化の視点」の3つの切り口で意見交換をした。「対象」では、高齢者／幼児・子ども／マイノリティ／障害者の4つのコーナーが作られ、参加者はそのどれかを選んで集まり、意見交換。「場」では学校・職場／施設／地域／家庭／「視点」では、理想の文化／文化的特色／遊びとアート／文化批判のそれぞれ4つのコーナーが設けられた。参加者はコーナー選びをもとに自分の

VII 特別講演

報告：中島智

家族にとっての幸せ—NHK朝の連続テレビ小説「あさが来た」脚本執筆を通して見えてきたこと—



想を寄せていた。作品にもご自身の生き方にも「支え合う家族」を紡いでいくと森氏の思いに、参加者は大きな感銘を受けていた。

脚本家・演出家の大森美香氏による講演では、脚本家の仕事について紹介があった後、「あさが来た」が出来るまでのエピソードを脚本の現物を示してお話いただいた。実業家で日本初の女子大学設立に尽力した広岡浅子をモデルに、夫婦や姉妹といった家族の姿を通して、あさの物語が描かれた。理想の家族像を求めるよりも、各人各様の生き方を見つけていることを提案され、講演は終了した。脚本執筆を終えて、旦那と娘の支えに感謝したい、とのことばに、参加した東京立正短期大学の学生たちは、「相手を思いやるのが大事だ」と思った。「小さいことを見逃さず」「ありがとう」と言いたい」といった感想を寄せていた。

VIII シンポジウム

報告：阿比留久美



シンポジウムでは、弁護士志摩勇さんからは親族による高齢者の財産の困り込み（経済的虐待）の現状、母子生活支援施設施設長の森菊世さんからは施設で暮らす母子の事例の紹介と現状、ゲイ当事者で行政書士の永易至文さんからはLGBTが直面する「暮らし、お金・老後」の問題に対応する制度設計についてお話いただいた。異なる職種・分野の方のお話であったが、既存の「家族」枠組みの限界が通底しており、「家族」以外の制度を活用した生活の立て直しや生活設計の可能性も示された。ライフスタイルや家族のかたちが多様化する中で新たな「家族」のかたちも提示され、シンポジウムタイトルにふさわしい充実した議論がなされた。